



英 語

アメリカに於ける外国語教授の実際

伊 藤 俊 一

フルブライト英語教員教育計画により、1955年8月より6ヶ月間、56年2月末まで滞米し、種々の視察、見学をすることが出来た。以下その中から外国語の授業について、見た所を述べてみたいと思う。

我々日本人にとっては、英語は外国語であるが、アメリカ人にとっては「国語」なわけで、その教授法をそのまま我々の英語教授の参考にするわけにはいかない。生徒側の条件や環境も、興味や必要度も全く異なるからである。それでアメリカ人にとって外国語であるフランス語、スペイン語が、理論はともかく実際に、如何に教えられているか、とくに初心者をどういう風に導入してゆくかを見たいと思い、機会あるごとに見聞することにつとめた。又アメリカには莫大な数の外人学生が居り、全然英語が話せず、読みも出来ないのも多数入って来るので、彼等を対象にして英語を教えるコースも、大学にはあり、その授業も見ることが出来た。以下次の順にしたがって述べてゆきたいと思う。

- I ワシントンの American University に於ける外人学生を対象とした英語教育
- II テキサス大学の外国語教育
- III テキサス大学の外人学生を対象とした英語教育
- IV テキサス州オースチン市立高校の外国語教育
- V ニューヨーク州北部の高校外国語教育
- VI 結 び

I ワシントンの American University に於ける外人学生を

対象とした英語教育

8月下旬首都ワシントンに着き、9月上旬にはじまる orientation course に先だって、American University を訪ずれ、外人学生に英語を教えるクラスを二三見学した。学生は主に南アメリカ及び中近東のものが多かった。クラスを構成している学生の国語が区々なので、説明のことばも必然的に英語になり、教師は仲々苦労しているようであった。とくに初歩の段階にあるものの場合は、黒板に絵を描いたり、身振り、手まねをまじえたりして説明していた。先ずこの学生達の置かれた環境を考えてみると、一歩外へ出ればどこへいっても英語が話され、自分達もアメリカへ来ている以上、専門の如何を問わず、英語を通してそれぞれの学問を修めねばならないという必要を持っている。外で疑問に思ったことは教室へ持ち込んで解決出来るし、教室で教わったことは、そのまますぐ日常生活に役立つのである。こういう環境のもとで、こういう必要にせまられ、Oral Method で教えられれば、その効果は大きいものと想像された。最初に見たクラスは初歩のもので、程度は日本の中学2、3年のところで、dictation や questions & answers が行われてい

た。questions & answers は実にキビキビと短かく早いもので、答えも素早く行うことが要求されていた。つまり質問を頭の中で母国語に翻訳したり、母国語を英語につくりかえたりする時間を極力排除して、直解即答を行わせるのである。たえずこれを行うことにより、反射的に正しい答えが出て来るようになるのである。授業の終わったあとで、二三の学生と話してみたが、まだアメリカへ来て3、4週間しかたゝないにもかゝらず、片言ながら結構理解出来る英語を話した。発言が、南アメリカの連中はスペイン語の訛りが入り、聞きにくい点が多かったが、語いは英語と共通なものが多く、その点彼等はらくなようであった。同じアルファベットを使っていることがかえって、英語の発音をする場合、どうしてもスペイン語の発音が出て苦勞すると云っていた。

次に見たクラスは相当進んだもので、テキストは、Everyday Dialogues in English for the Foreign Born という本で A Practice Book in Advanced Conversation という副題がついていた。著者は Robert J. Dixon である。この本は、日本にあるアメリカ文化センターに数十部ずつまとまっているから、センターへ行けばすぐ見られると思う。外国人のための英語テキストシリーズで、入門、発音練習から物語、小説の simplify したもののまで数冊に分かれているものの一つである。内容は Bank, Post Office, Grocery Store 等々での対話が2、3頁にわたり、各課の後に questions が15位ずつ付き、vocabulary drill と短文作成問題等がついている。これを使って、一時間一課の割でどしどし進んでいた。授業の大体の順序は、教師の reading、語句の説明、質疑応答があつてから、必ずしもテキストの問にこだわらない内容の問答があり、drill を行つて、次の課を読んで来るように assign する。前にも述べたように、学生の英語に対する必要度が高く、生活環境も英語を使わざるを得ないので授業に活気があり、教師の一人舞台とはならない。又教師の自由自在の説明、paraphrase や、キビキビした問答等、全く理想的な Direct Method で我々も2、3週間このクラスで勉強したらさぞ英語を話すのがらくになるだろうと思ったことである。

II テキサス大学の外国語教育

1. フランス語

9月19日にテキサス州の首都オースティンについた。州立のテキサス大学では丁度登録の最中で、学生達が各々のとるコースを、長い列をつくって register していた。二三の英語英文学コースの他に、外国語教育の実際をみたいと思い、フランス語の入門コースをとることにして教室へ入った。教師は30才前後の美しいパリジェンヌで、握手をした手が柔らかであった。日本の英語教師である旨をいって、入門期の指導の仕方を参考にしたいから他の学生と同様に取り扱つてくれとたのんだ。この人の英語は非常になめらかで美しかったが、さすがフランス人で、「h」の音が時々落ちた。How many? というのが、[au meni] となる。

このクラスは、高校で外国語をとらなかつたもののためにあり、高校で外国語をとったものは、それぞれの単位数に応じて、より程度の高いコースをとることが出来る。なにしろ学生数1万8千人を擁する州立大学であるから設備もよいし、コース数も多くあり、好むものをとることが出来る。入学試験はない。その代り各学期の試験で落ちれば何回でも同じ程度のことを繰返し学ばなければならないので、出来の悪い学生は、何年経っても卒

業出来ないことが起る。その点、大学に入ったら勉強しなくなる日本の学生と違い、仲々勉強するものは、よくするようである。

一週の時間数は5時間で、それに地下の特別教室で各自スピーカーから流れる教師の声につれてする drill が2時間ある。この教師の声はテープに録音しており、発音練習、問答等が適当な間を置いて流れ、その interval に各自学生が口を動かして練習できる仕組みである。こうして、教師に負担にならずに drill が行なえるわけだが、熱心に練習している学生もあるが、折角の録音を子守唄にして、舟を漕いでいるのも散見された。

愈々授業が始まったが、先ずスライドを使って発音器官の図を示して、母音、半母音、子音、鼻音の出し方を説明し、実際に発音させて、矯正したりする。説明はすべて例の [h] の時々落ちる、愛嬌のある英語である。こうして一週間すると文に入るが、綴りは数えず発音記号のみを使って板書し、あとは口頭で云わせる。説明は英語で、その文の意味も英語でいってくれる。二、三の文を土台にして、口頭で questions & answers を行い、一人一人生徒にあてる。

“Qu'est-ce que dit le professeur ? ”

“Il dit, 'Bonjour'.”

(“What does the professor say ? ”

“He says, 'Good morning'.”)

この程度の間答を次から次へとあてゝゆく。ここでも素早い答えが要求され、グズグズしていることは許されない。これが大体一週半程続いてから、プリントが配付された。2つの部分に分かれていて、始めの半分はすべて発音記号で文章が記されており、後半は普通のフランス語の綴りで同じ文章が印刷されていた。このあたりから発音と綴りの関係が説明され、普通の文へと導入されるのだが、発音と綴りの相関関係が規則的なフランス語なら出来るが、複雑怪奇で、例外だらけの英語の場合、仲々まとめることは難かしいように思われる。

綴りの段階に入るとすぐ始められたのが、動詞の変化であつた。これは規則、不規則にわたって色々あるのを、我々が小学校で九九を暗誦する如く、無条件で覚えるより他、仕方ない。毎時間必ず暗誦させ、黒板に出して綴りを書かせる。

そもその始めから約6週間で、以上の class work と並行して、short stories を読み始めた。これが順を追ってだんだんと複雑な動詞の時制が出て来るように配列されている。例えば、最初の課は現在形のみ、次は二三の大過去をまじえ、次は未来という風にある。本を開けると右側に本文、左側の頁には本文に対応するように questions が配列され、問答の drill が出来るようになっている。この問答は、教室では説明されるだけで練習は、先に述べた地下の特別教室で各自スピーカーを通して自分の都合のよい時間に行うのである。

12月に入ると、どのコースでも中間テストが行われる。その形式は、我々の行なう translation あり、空所充填もあり、動詞を、示された時制に変える問題もある。又3人ずつ教師の前に出て、絵を見ながら先生の質問にフランス語で答える口頭試問もあった。

大体以上の如きものであつたが、全体を通じて感じられることは、特に我々の日常行っている教授法と、根本的には、違いがないということである。たゞ教師が生粋のパリッ子である点と、機械力を応用して、教師の負担にならずに充分な drill が行なえることが違

いである。考えてみると、これが一番大事なことで「正しい言葉を充分練習する」というのが昔も今も変らぬ、語学教育の根本原理であろう。その上に教材の配列とか、説明の巧拙とか、色々考えなければならぬ技術的な事柄が生じて来るのであろう。

2. スペイン語

11月に入ってから時間の都合が出来たので、スペイン語初歩のコースへも出てみた。これはすでに開講して6週間経っているわけで、導入期の模様は見る事が出来なかった。時間は一週5時間で、それを3と2とに分け、3時間が主としてテキストの講読と文法説明、2時間が話し方、聞き方の drill にあてられていた。教師も別で、片方は Harvard 出の男、他は南アメリカ人で、木暮実千代を、さらにキツイ顔にして、ひとまわり大きくしたような女であった。授業のすゝめ方は、フランス語の場合と大同小異であるが、テキストはフランス語のコースで使っていたものより念入りに、よく出来ていた。配列の仕方は、易より難へ無理なく進むようになって居り、一つ一つの課は、先ず語いから始まり、次に本文が来、本文の内容を持ちながら全部対話の形の会話がこれにつき、その後、*Did you guess the meaning of these words correctly?* という題目のもとに補ないの語いが並べられてある。さらに文法説明がこれにつき、exercises は、動詞変化から、形容詞変化等、その課の内容を網羅し、穴うめ問題から questions & answers, 短文作成、自由作文、英文西訳までふんだんについてそつがない。これらの exercise はすべて2時間のクラスで説明され、地下の listening room で何回でも繰返して、納得のゆくまで練習することが出来る。学生の中には、自分でテープレコーダーを持って来て、それに drill をふき込んで家にもちかえって練習するものもいた。

テキサスはリオグランデの河を境界として、メキシコと接して居り、州内にスペイン語を話す人間が相当多く、年寄のメキシコ系の人間は、英語の話せないのも居る。現に筆者が、サンアントニオ市に行ったとき、へいにペンキをぬっている男に路を尋ねた所、話を通じないで、同行した南米人がスペイン語できいたらはじめて意志の疎通が出来たことがある位で、スペイン語の必要度は、フランス語に比べて大きいので、生徒もそれだけ熱心であり、教室全体の空気も自然、活気に満ちていた。

III テキサス大学の外人学生を対象とした英語教育

中近東の石油が世界的に重要性を帯びてくるにつれて、イラン、イラク、シリア等から多くの留学生が来るようになり、特にテキサス大学は oil engineering に優れた学部を擁しているので、数多くのアラブ系の留学生がいた。これらを対象に英語を教えるコースが色々あったが、相当進んだ程度のクラスの模様を述べてみたい。

教授はデブプリ太って、よく透る声を持ち、発音は明快そのもので歯切れがよかった。テキストは Complete College Reader。1000頁に亘る厚い本で、英米の作家を広範囲に収めた文集である。これを使って、10頁程ずつ宿題として読んで来させ、適当にあてたり討論させたりして説明を加え、又レポートを提出させたりした。教授にきいてみると、このクラスの学生達はもう相当に読み書きも出来るし、話すことも出来るので、主な目的は社会的概観を得させ、種々な人生観に接して自分の生き方をとらえさせ、さらに高度の読書へ向かわせるのだということであった。程度でいうと、アメリカの高校の国語教育位であろう。明快適切な説明、豊富な話題、歯切れのよい発音、と三拍子揃って実に楽しみな

講義であった。

IV テキサス州オースチン市立高校の外国語教育

テキサス州高校のカリキュラムに於ける外国語の位置はelective courseで、理科と抱き合わせになって居り、大学へ行かないものは勿論、行くものでも取りたくなければとらないでも卒業出来るし、大学へも入ることが出来る。むろん、単位をとってあれば、大学入学のための単位として勘定してもらえる。すなわち外国語を4単位なら4単位とっていれば、大学に入ってから、先に述べた初歩のコースでなく、もっと進んだコースをとることが出来て、それだけ他へ力をそぐことが出来るのである。州立大学へ進むつもりならば、入学試験はなく、日本のように地獄の苦しみを受ける必要は全くない。そのため高校の外国語教育は、のびのびと、正しいと思う方法で、入試にわずらわされずに行うことが出来るわけで、実に羨しい限りである。

Travis High School は市立の高校の一つで、外国語のコースは、フランス語、ラテン語、ドイツ語、スペイン語の4つを持ち、夫々15名程を限度として、理想的な数の学生を各クラスに入れていた。前にも述べた如く、テキサスの地理的条件から、スペイン語の必要度が他に比べて高いので、スペイン語のクラスを見学してみた。生徒は14名で、そのうち男子は3名であった。彼等はすでに2年半スペイン語を習っていた。その時間に教室に入ってみると、一人の生徒がブラジルの発電所についてスペイン語でレポートを書いて来て、それを皆の前で発表していた。短かい素直な文を多くつかって、紙二枚程のレポートを読み終ると、皆から質問が出てそれに答えるのだがすべてスペイン語でなされた。うまく云えなかったり、文法的間違いがあるときは、教師が注意し、英語を用いて明確に説明していた。生徒達のスペイン語は、日本で教える英語の程度で云うと、中学の二年から三年の程度と思われたが、それを間違いながらもどしどし使って、自分の云いたいことを表現しているのには感心させられた。

授業の後半15分程を我々のためにさいて座談会を持ってくれたときに、こちらの感想をのべてから、入門期の授業についてきた所、やはり Oral Method を実施したようで、全然英語を使わずに、問答や絵を通して導入し、その後綴りに入ってから文法説明を加えていったということであった。教師は30才位のアメリカ女性で、Teachers' College を卒業後、Mexico に二年間実地に勉強して来たといっていた。100ドルもあれば飛行機で往復出来、自分で自動車を運転しても行って来れるわけで、その点我々とは全く置かれた環境が違っているのが痛感させられた。

V ニューヨーク州北部の高校外国語教育

クリスマスから翌年1月4日までの休暇が終る頃、ニューヨーク州北部の避暑地に近い South Glens Falls という、人口5千程の小さな町の高校に行って参観することになった。川一つ越えたと人口2万の小都市 Glens Falls でそこには公私立合わせて3つの高校があった。テキサスとは逆の北端で、カナダと境を接しているので、ほとんどスペイン語はきかれず、むしろカナダのフランス語を話す地域に近いせいか、高校の外国語としてはフランス語とラテン語が置いてあった。

South Glens Falls 高校は Central School といっ て、小学校から高校まであり、この附近の山地から、遠いのは12キロも離れた所からスクール・バスで生徒をあつめて教育する学校で、これが出来る前は各地に、日本の分教場のように、50名位の生徒数の学校が散在していたのだそうである。大雪でバスが通わなくなると休校で、その報らせは、ラジオを通じていち早く生徒に達する。大学進学希望者は30%である。この高校のフランス語の授業をみたが、主として文法の説明に終り、drill は行なわず、テキサスでみたスペイン語の授業とは雲泥の差であった。生徒の学習意慾も低く、活気がなかった。必要度の低さも大きな原因と思われるが、教師の側にも多少の責任はあるようだ。日本の高校教育から、大学入試をとりさつたら、案外このような程度になってしまうのかもしれない、という考えがフトしたことである。

次に川を越えて Glens Falls 高校を訪ずれた。この高校は市立で、単に高校としてではなく、Community Center として各種集会に使われたりするので、設備もよく整いの、とくに講堂は、ニューヨークのロックフェラーセンターにある Radio Hall の小型のものと いわれる程の立派さであった。進学希望者は全体の50%ということであった。ここでみたフランス語のクラスは、(始めてから3年目の)30人の生徒からなっていた。テキストはイソップの物語で丁度のろまな熊が狐にだまされて池の氷に尻尾をちぎられる話を読んで いた。さすが三年生だけあって、説明や問答も大体フランス語で行われ、こみ入った文法説明のみ英語を用いていた。一時間の授業しかみていないので、果して生徒がついてい ているのかどうかハッキリわからなかったが、見た範囲では、そう活気はないが、どうに かついていっているようであった。教師の発音は、しかし、どうしても英語特有のクセが 出て、単母音や長母音が二重母音化する傾向があった。たとえば [ferme la fənɛ:tr] が [fermei la fəneitr] となるのである。

VI 結 び

以上、種々な条件下の外国語の授業をみてきて、最も感じられることは motivation の 重要性というところである。生徒をしてその外国語の習得に向かわしめる力は色々考えら れる。環境の力、必要度、興味があるが、それぞれが互いにまざり合いつゝ、その上に教 師の質、設備等が加わって立派な結果を生み出すことが出来るのであろう。今、日本の高 校での語学教育を考えてみると、映画やラジオを除けばとくに地方では殆ど英語を耳にし 口にする機会はなく、必要度はといえば、大学入試位なものなので、余程教師がたくみに 興味をかきたてゝゆくか、いや応なしに、drill を課していかなければ語学力の円満な発 達のはぞめない。生徒の興味の起るのを待つのでは、それこそ百年河清をまつにひとしか ろう。それにつけても思い出すのは、英国からフランスへの船上で乗り合わせた50人ばか りの英国 middle school の生徒達のことである。丁度 Easter の二週間の休暇を利用し さらに二週間をつけ加えて、パリのある高校との間に話し合いがついて、お互いに150人 位の生徒達を交換して、それぞれ家庭に迎え入れられ、英国の生徒はパリの高校で、パリの 生徒は英国の高校で、4週間の間、自分達の習得した外国語を実地に使って、見学や勉 強をするということであった。船がフランスの港に近づくにつれて、友達同志眼に入るも のを指しては“Say! What do you say ‘a sea-gull’ in French? .”などと話し合い、 実ににぎやかであった。

こうしたことの希めない、アジアの孤島日本の英語教育は、教師があらゆる機会をとらえて自分の英語を磨き上げ、自ら楽しみつつ、生徒をぐんぐんと引張って行かなければ、到底所期の目標には近づけまい。責任は重く、道は遠い。

高等学校における第二外国語について

樫 本 英 彦

戦後の学制改革が、我が国の教育制度に非常な変化をもたらし、その影響が数々見られるのであるが、その中の一つとして第二外国語の問題がある。

第一外国語、すなわち英語においては、たとえば学力の低下という副次的な結果が見られる一方、新しい制度と関係して、高等学校の入学考査に英語を課すかどうか、とか、中学校で英語をやったにもかかわらず、それ相応の実力がついていないとか、いろいろの困難な問題が起って、その中の一部には解決の方向に向かっているものもあるし、今尚多くの議論をのこしているものもある。

第二外国語においても、同じような問題が生じ、その決定的な影響は大学生において、ドイツ語あるいはフランス語の実力の低下となってあらわれ、講義や研究において、これらの外国語を十分に活用する事ができない実情にある。

今旧制の学校制度と比較して見ると、旧制の高等学校あるいは専門学校において、これらの第二外国語を習い始めたその年令を現行のものに比較して見れば高等学校の3年という事になる。したがって、現在、大学に入学してはじめて第二外国語を習い始めるならば旧制に比べて、一年の立ちおくれを見ている事になる。そして、大学の二年目からは専門課程に入るから、第二外国語の基礎の実力を養う期間は一年ないし二年となる。あるいは専門学課の学習の期間内に、この外国語の学習を持ちこまなければならないという事となる。

したがって、学生の第二外国語の実力が昔と同等である事を望むならば、少くとも高等学校の3年、あるいは2年から、これが教えられなければならない。新制と旧制では、名前は同じでも、高等学校の性質は全く違うのであるから、1年から教えるには及ばないし英語の学習を考慮に入れるならば、必ずしも好ましい事でもないと思う。

以上のべた事が第二外国語の学習についての理想的な内容である。しかし実際においてはこの理想は殆んど達せられていないと云ってよいが、その理由は一体何であるだろうか。

これには大きく云って三つの原因があるように思われる。

第一は高等学校に入ってくる生徒の英語の実力の問題である。現在一般の高等学校の入学試験に英語が課せられるか、否かが先ず問題にされているのであり、さらに課せられたとしても、その内容はごく初歩的なものであり、これに合格するためには中学三年の英語教科書の学習を放きして、もっぱら一年、二年の教科書を練習すればよいと考えると傾向も一部にはあるくらいである。したがって高等学校に入学する生徒の英語の実力はおして知るべしであって、その二年、あるいは三年から第二外国語を課する事は不可能だと云ってよい。ここで不可能という意味は第二外国語は、第一外国語すなわち英語の実力が相当